



☆ 一度きりルール の巻 ☆

『光文社 20/12/25/VERYWEB のじまなみさんのコラム』



性教育で大事なことは【子どもが性教育を学べる環境を持つこと】と、【大人の当たり前を変えること】だが、日本の遅れた性教育の中では容易ではない。そんな始まりです。

私はかつて、高校理科の教師でした。毎年、生命教育の一環で性教育をした経験があります。ある程度の知識も分別もある高校生が相手でしたから、真面目に捉えてくれました。それでも、性教育には覚悟が必要でした。「質問に答えられるだろうか…」という不安があったからです。



文中、のじまさんも度肝を抜かれるような質問を何度も体験したと書いています。さらに、本来、性はとても身近なものであり、自分の体や命のこと、日常の中に在る性を知りたいと思う子どもの気持ちは、『飛行機はなぜ空を飛べるか』と同じくらい、ありふれた疑問の一つであり、アダルトな感情は一切ない、と続きます。文字が読めるようになり、単語として耳にした子どもの素朴な質問なのです。『そんなこと、知らなくていい!』と叱ったり、無視したり、逃げたり、戸惑うと子どもは、敏感で繊細であるがゆえに、「この手の話を親に尋ねたらダメなんだ」と解釈し、次に疑問を持って、自分の体の変化についても、もしかして性的なトラブルにあったとしても、二度と親に質問や相談をしにくくなってしまいます。この現象を「一度切りルール」と呼ぶ。と、ありました。



子どもはあなたの事が大好きだから、あなたが困った顔、怒った声になると、『しまった!』と感じ、嫌われないように、あなたがイヤがりそうな事は話さなくなるのです。イジメられている話をしないのも同じ理由でした。

どうしたら良いのか、性の事も、イジメの事も、プロである私も含めて、じょうずに答えられる人はいません。これまで繰り返しお伝えしてきましたが、イジメも、不登校も、自傷行為も、性のことも、どんな質問にあっても、真面目に尋ねられたら池上彰さんみたいにひとまず、『それは良い質問だ』と、受け止めてあげることが大事。それが子どもに安心して尋ねられる状況を作ることになるのです。受け止めて、それから、どうしたいのかを察して、自分の事を知るチャンス、他人をいたわるチャンス、身を守るための知識を学ぶチャンスにしてあげてください。



イラスト/おぐらなおみ